

34 『善那余話』からみたジェンナー画像収集の経緯

深瀬 泰 旦

順天堂大学医学部医史学研究室

ジェンナー種痘発明百年記念会が明治二十九年に奨進医会の主催でおこなわれ、そのおり会場にジェンナーの画像が展示された。田口和美会頭は開会の辞において、ジェンナー画像を展示することができたのは、浜松在住の牛田友質、佐々木養の厚意によるものであることを明らかにした。

この記念会については昨年の第一〇五回総会において報告したが、この二人がどのような人物であり、この記念会とどのような関わりをもっていたかについては明らかにしえなかった。今回『善那余話』を披見することによりこの経緯を説明できたので報告する。

『善那余話』は一六・二cm×二三・五cm、二八ページの穿孔版袋綴和綴本である。筆者三輪桂作が話の大

筋を七二歳になる母からきいて執筆したのは昭和七年（一九三二）であるという。はじめ郷土雑誌『土のいろ』に掲載され、のちに尋常四年の修身の発明（ジェンナー）に関する補充教材として浜松市の曳馬西尋常小学校によって編纂されて、昭和十三年（一九三八）九月に穿孔版で発行された。『善那余話』にある「善那祠堂建立の企」（三輪桂作 補飯尾哲示）の章から、ジェンナー像収集の経緯をさぐることができる。

静岡県浜松病院で会計係をつとめていた牛田友質と佐々木養が、ジェンナー祠堂を建設しようと企てたのは明治二四年であるという。一〇年ほどさかのぼる明治一五年ころに、院長福島豊策と副院長多々良梅庵のジェンナーについての衛生講話をきいて、ジェンナーの牛痘法が人類を救済するうえにいかに偉大な力を発揮したかを知ることになったことが端緒であった。そこでジェンナーの遺徳を永久にたたえたいという意図をもって、その像をまつる祠堂を建立したいという気持にかられたのである。

二人はジェンナー像の建立に必要なとなるジェンナー

の肖像画を蒐集することからはじめた。単刀直入にロンドン総領事館勤務の大越成徳領事に接触をはかったところ、この依頼に答えて大越領事は六葉の写真を送ってくれた。うち一枚は『善那余話』の口絵にのる図からグロスター教会にある立像の写真であり、他の一枚は書簡の記述からケンジントン公園にある有名なジェンナー像の写真であることがわかる。そして他の一枚は「善那氏種痘発明百年記念会」の出品解説カードから、ジェイムズ・ノースコートが描いた肖像画の写真であることは明らかである。しかし六枚のうち、その内容がつかめるのは三枚にすぎない。

大越領事の厚意によってジェンナー像を入手した二人は、「種痘発明人エドワードジェンネル氏祠堂建設主意書」を作成して同志をつのって募金を開始したが、運動半ばにして日清戦争が勃発して事業の進捗は思うにまかせず、ついに断念せざるをえない状況に追いこまれた。そうこうするうちにジェンナー種痘発明百年という節目の年を目前にして、かれの偉業を顕彰しようとする中央の計画を耳にした二人は、浜松における

従来の計画を断念し、中央の事業に参加することを決心して、肖像写真と賛成者からの寄付金を提供することを大日本中央衛生会に申出た。

それによって三月四日におこなわれた奨進医学会主催の記念会に展示された肖像は、牛田と佐々木が提供したジェンナー像写真六葉と、富士川游所蔵の「ジェンナー家族ノ像」一葉、藤田文蔵制作のジェンナー塑像などであった。